

三美印刷株式会社

PDC-SRに更新し、既設機ともCMSの連携を実現



総合工場部部长
前田 明人氏

「数値で管理できるので品質に対する管理がやりやすくなりました。見える化はとても重要」

出版物や商印などを総合的に手掛ける三美印刷株式会社は、2005年に導入していたリスロン4OSP（菊全判両面4色オフセット枚葉印刷機）の分光式色調管理装置を、2018年3月「PDC-SR」に更新した。導入時から搭載していた「PDC-S」のヘッドのメーカーサポートが終了したためだ。導入から1年以上が経過し「高度なカラー管理はもとより、従来以上に作業性が見える化に寄与している」と評価する。前田明人部長、鶴岡一弘課長、和田崇課長にお聞きした。

的確な対策で両面機のPDCをレトロフィット

三美印刷は1895年創業、1949年設立。老舗として学術出版に強く、近年はこの分野独特の高精度なカラーへの対応力が顧客の支持を集めており、同時にそれが商印での強みともなっている。同社では、高度に管理された確かなカラー環境を顧客に提供することを推進し、常に印刷機や周辺機器の増設・更新に努めてきた。

現在、カラー印刷機のラインアップはいずれもKOMORI機で、今回PDC-SRに更新したリスロン4OSPと、昨年5月に導入したHUV搭載リスロンG40（菊全判5色オフセット枚葉印刷機）、HUVを後付けしたリスロンSX40（菊全判4色オフセット枚葉印刷機）、リスロンS32（四六半裁4色オフセット枚葉印刷機）の4台の体制となっている。4OSP以外の3台に

搭載するPDCシリーズは、それぞれの印刷機導入時期により異なり、「PDC-SX」「PDC-SII」「PDC-LiteII」が搭載されている。これまでHUV機と油性機が混在する環境で、各PDCを駆使した自社基準のカラーマネジメントを順調に進めていたが、最も導入時期の早いリスロン4OSPに搭載されていたPDC-Sに対し、ヘッドメーカーによるサポートの終了が発表された。いち早く対応をKOMORIと模索していた同社では、スムーズにPDC-SRへの更新を行なった。

「見える化」が向上CMSが他3台と同レベルに

PDC-SRへのレトロフィットから1年以上が経過し、前田部長は「PDC-SRにより、まずは従来と同様の色の合わせ込みが、より短時間でできるようになっています」と基本性能を評価する。

再版データが呼び出しやすくなり短時間印刷にも効果

作業性について鶴岡課長は、ビットものの色合わせ・刷り出しが容易になっているという。「当社の濃度基準に対して各色で上下を指示された場合、その品目ごとの記録と呼び出しが非常に簡単になっています。濃度変更後の刷本を測定し、ジョブ名ごとに自動的にその数値を更新する機能があります。ジョブ名の入力も楽で、記憶量も大幅に増えており、毎月の定期ものの対応に有効です」と説明する。

またシステム運用のリーダー、和田課長は「以前はキーボードのテンキーから数値を入力して濃度調整を行っていましたが、PDC-SRではタッチパネルのプラスとマイナスのボタンから調整でき、しかもその変更をモニターで即座に確認できます。それにより本刷りをスタートさせるかどうかの判断がしやすくなりました。また「トータルでの色調確認作業にかかっていた時間が短縮。損紙削減にもつながっています」などと、さまざまなメリットを挙げた。



総合工場部印刷2課課長
和田 崇氏

「PDC-SRは、操作性も良く、時間の短縮が図れるなど、いろいろな効果を出してくれています」

今回のレトロフィットの効果を生かし、前田部長は今後、どのような工場を描くのか。「各PDCにより、当社の色基準や

KP・コネクトとの統合も構想 全社最適化の一翼にも

前田部長は生産の現状を「過渡期」と位置付けている。「社員は導入された新しいシステムを通して、今後の方向性を感じ取ってくれています。未来に向かって同じ方向を向いてくれている雰囲気がある」と笑顔を見せた。

色調管理をクライアントから要求されるようになった今、PDC-SRによる詳細なデータが確かな品質保証となっている。



TOKYO

本社 / 東京都荒川区西日暮里5-9-8
総合工場 / 東京都荒川区町屋6-32-7
https://www.sanbi.co.jp/
TEL / 03-3892-3311



総合工場